神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

届かないテクストとしてのアシア・ジェバール『フランス語の消滅』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-07-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 旬子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/814

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

届かないテクストとしての
アシア・ジェバール『フランス語の消滅』

武　内　旬　子

「私は作品を書くとき，読者のことは考えません（読者は架空の存在だからです）。また，私自身のことも考えません（恐らく，私もまた架空の存在であるのでしょう）。」　　ボルヘス

はじめに

『フランス語の消滅』[1]と題された本を手に取るとしよう。タイトルはフランス語で書かれており，カバーには女性の顔写真（右半分のみ）が使われている。著者を知る読者は，それが著者本人の写真であることを難なく認め，また，彼女がアカデミー・フランセーズの会員であることを思い出すかもしれない。そしてタイトルの意味を自問するだろう。これは，いかにもアカデミー会員の作にふさわしい，消滅の危機に瀕するフランス語の「擁護と顕揚」を目指す小説なのか，と。ただし，『フランス語の消滅』は2003年に出版され，アカデミー会員選出は2005年なので，結果的に，将来の肩書きにふさわしくなったと言うべきか。内容は，英語に押されて劣勢に立たされているフランス語の話だろうか。それとも，アルジェリア出身者として初のアカデミー会員という著者の出自を考えると，アルジェリアにおいてフランス語

1　Assia Djebar, *La disparition de la langue française*, Albin Michel, 2003.

が存在感をなくし，社会から消えていくということなのか。どちらにせよ，フランス語で執筆する作家なのだから，当然，「フランス語の消滅」に抗する内容だろうと予測する読者は少なくないはずだ。実際，これまで提示されてきた解釈は，このテクストにはその消滅の危機の過程が描かれているとし，そこに様々な意味を見出そうとするものが主流である。そして，これを書いた作家ジェバールの姿勢は，あくまでその消滅に抗するものとして考えられている。

これまでもジェバール作品を論じる者の多くは，アルジェリアにおけるフランス語がガファイティの言う「保持すべき豊かさ[2]」であることを自明の前提としてきたように思われる。『フランス語の消滅』についてはなおさらである。たとえばオライリーは，この小説の主人公および語り手の一人で最後に行方不明になるベルカヌの失敗は，「一つの特殊なナショナルヒストリー[3]」へと収斂する物語によって自らをアルジェリアに再統合しようとしたことにあると解釈する。そしてジェバールのテクスト自体は，ベルカヌとは逆に「ポストコロニアルな光のもとに自分の存在を見直し，語り直すことを望むアルジェリア人主体にとって，アルジェリアにおける存在の断片化，複数性，価値の多様性を出発点として受け入れ必要があることを示している[4]」とするのだが，フランス語が，アルジェリアの複数性，多様性を担保する要因であることは当然の前提になっている。また，ボワダールは，ベルカヌの物語を「フランス語話者の知識人や作家の運命を例証している[5]」とみなし，「アルジェリアにおけるフランス語の消滅はあらゆるレベルでのこ

2　Hafid Gafaïti, *La diasporisation de la littérature postcoloniale,* L'Harmattan, 2005, p.223.

3　Michael F.O'Riley, "Victimes, héros et spectres du passé colonial dans *La disparition de la langue française* d'Assia Djebar", in *Nouvelles Etudes Francophones*, Vol.21, No.1, Printemps 2006, p.161.

4　ibid.

5　Christiane Boidard Boisson, "*La disparition de la langue française* d'Assia Djebar: le mirage de l'impossible retour?", in sld. Najib Redouane et Yvette Bénayoun-Szmidt, *Assia Djebar*, L'Harmattan, 2008, p.316.

の国の後退と対をなしている[6]」と述べる。これは，特に90年代のアルジェリアの混乱期にフランス語使用を擁護するために頻繁に用いられた論である。さらに，シュシャールによれば，『フランス語の消滅』は，「政治的，歴史的言説をその支配的地位から引き下ろす姿勢によって特徴づけられている[7]」という。

これらの解釈には，ポストコロニアル作家ジェバールの作品なのだから，これまでの彼女の書いてきたものから見ても，当然，『フランス語の消滅』も，アルジェリアにおけるフランス語使用の重要性，文化やアイデンティティ構成の多様性，権力批判などを表現しているはずだという思い込みによるところがないだろうか。

内容のみならず，形式の解釈においてもジェバールなのだから，というある種の先入観に基づいたと思われる解釈もある。ジェバール作品の多くは，語り手が頻繁に交替する複雑な語りの構造を持つ。ベンハイムは『フランス語の消滅』は「英語で言うところのミスリーディング[8]」を誘う作品だとしながら，「（ジェバールの）非常に魅惑的な散文，その調和のとれたポリフォニー，なめらかな交差[9]」によって人を魅了すると述べている。たしかに『愛，ファンタジア』を始めとする作品では，各部分がまさに「なめらかな交差」によって見事に構成された複雑な語りが魅力の一部を成している。だが，『フランス語の消滅』についても同じことが言えるだろうか。この小説でも，語り手は一人ではない。それ以上に特徴的なのは，手紙，日記，散文詩，一種の「自伝」など，性格の異なるテクストによって構成されていることである。そして，その構成は，かならずしも「調和のとれたポリフォニー」

6　ibid., p.317.

7　Béatrice Schuchardt, “Manifestation d’une esthétique interstitielle dans *La disparition de la langue française*”, in Wolfgang Asholt, Mireille Calle-Gruber et Dominique Combe éds, *Assia Djebar, littérature et transmission*, Presses Sorbonne nouvelle, 2010, p.366.

8　André Benhaïm, “Pas à pas: l’œuvre vagabonde d’Assia Djebar”, in Audrey Lassere et Anne Simon éd, *Nomadisme des romancières contemporaines de langue française*, Presses Sorbonne nouvelle, 2008, p.192.

9　ibid.

という印象を与えるとは言えない。この点，同じ小説についてフィッシャーは，「その構造上，記述上の極端な不安定さから，形式とジャンルの《ザッピング》と呼べる[10]」とすら述べているのだ。

内容についても，形式についても，ジェバールだからという予定調和的解釈をいったん脇におけば，小説の題名らしからぬ題名を持つこの小説はどう読めるだろうか。はたしてタイトル通りのテーマを追求し，消滅に抗する「抵抗文学」なのだろうか。また「消滅」するのは一体何なのか。本論ではこれらの問いを持ってテクストを再検討し，さらに『フランス語の消滅』がジェバールの仕事全体に対して持つ意味を探っていきたい。

1　ベルカヌという設定

『フランス語の消滅』を読み始めるとすぐ，読者は語り手が男性の１人称であることに気付く。ジェバール作品に「なじみのある」読者であれば，少々驚くことになる。この作家が用いる１人称の語り手はほとんどが女性だからである。（しかし，これが初めての例というわけではない。1967年発表の『うぶなひばり』では，交替する語りのひとつは男性登場人物の１人称によって担われている。）まず，この珍しい語り手がどのように設定された登場人物なのかを検討したい。

ベンハイムによれば，ベルカヌという名は，ジェバールの母方一族の名「ベルカニ」に由来するという[11]。この50歳目前のアルジェリア人独身男性は，小説の冒頭では20年を暮らしたフランスから帰国したばかり，アルジェ近郊の，家族所有の別荘に一人で落ち着いたところである。その「経歴」は１人称ではなく，続く章の匿名の語り手によって簡単に説明される。この小説の論者には，ベルカヌを指して「移民」という言葉を用いる者も多いが，彼は，高等教育を受け，フランス語に不自由することなく，パリ近郊で事務職

10　Dominique Fisher, *Ecrire l'urgence*, L'Harmattan, 2007, p.139.
11　c.f. Benhaïm, op.cit., p.194.

についていたのだから，一般的な移民労働者とは明らかに異なっている。ちょうど，ジェバール自身が移民労働者ではないように。アルベールは，しばしば，底辺の労働移民の体験を持たない作家が「《委任》によって[12]」移民の物語を書いていることを指摘しているが，『フランス語の消滅』の場合，作者も主人公も，そうした移民からは程遠い。

そのベルカヌは，安定した恋人関係を築いていたフランス人舞台女優マリーズから別れを切り出されたことをきっかけに帰国を決意する。ただ，なぜマリーズが別れようと言ったのか理由は示されず，「帰国者としての主人公」を成立させるためのきっかけにすぎないかのようですらある。ガファイティは，帰国の目的を「断片化されたアイデンティティの再構築[13]」にあると見るが，『フランス語の消滅』のテクスト中，ベルカヌがフランスでアイデンティティの断片化に悩んだことを思わせるような記述はない。逆に，この小説はいわゆる「移民の苦悩」的なものを一切排除しているのではないかと思われる。また，マリーズとの関係を除いて，フランスでベルカヌがどんな日常生活を送っていたのか，読者にはほとんど知らされない。別れ話がきっかけになってベルカヌに抑うつ状態を引き起こすのは，「この感覚をどのように定義すればいいだろう，未来がないという感覚を。（中略）未来がない！何も計画がない（16[14]）」という認識なのだ。これは，移民でなくとも，50歳を目前にした誰が抱いてもおかしくない普遍的な感情ではないだろうか。ノスタルジーという表現も出てくるが，それも，たとえば，地方から都会に出て働いてきた人が定年間近になって故郷をなつかしく思う感情とそれほど大きな違いはない。ベルカヌが別の文化圏から移動してきたことを示す指標があるとしたら，別れ話から２週間後，眠りにおちようという時に彼が

12　Christiane Albert, *L'immigration dans le roman francophone contemporain*, Karthala, 2005, p.99.

13　Gafaïti, op.cit., p.215.

14　Djebar, op.cit., p.16. 以下，『フランス語の消滅』からの引用は末尾にページ数を示す数字を添える。

「はっきりと聞いた（20)」というのが，亡き母の歌う「トレムセン[15]版のコウノトリの歌（20)」であり，望郷を誘う母の言葉が「洗練された言葉を散りばめたアルジェの街の方言にアンダルシア風の響きが混ぜあわされた(20)」口語だという点だろう。「言葉」はまた，別の方法でも，ベルカヌに帰国の決心を促す。彼は以前，書いた小説を複数の出版社に断られた後，書くのをあきらめていたのだが，帰国して「もう一度書きはじめるつもり(22)」なのだ。

そうして帰国し，かつてよく家族で滞在した海辺の別荘[16]に一人で住み着いたベルカヌは，自分が，起源の地に対して場違いになってしまったことに否応なく気付く。人気（ひとけ）のない海辺の別荘で，一人，海に向かっている限りではそうでもないのだが，生まれ育ったアルジェのカスバを再訪した時には，「地元民」と認識されずにカメラを奪われそうになり，また歴史ある建物が荒廃にさらされている様を目の当たりにしてショックを受ける。この部分は，独立後，歴史あるこの地域を，また一般に庶民が住む環境の整備をないがしろにしてきた政治権力への批判でもあるのだが，それ以上に，90年代初頭のカスバに，自らの記憶にあるカスバを見出そうとするベルカヌの失敗，帰ろうとして帰りそこねる失敗談としても読める。海辺には帰れてもカスバに帰れないベルカヌは，果たしてどこに帰ったのか。小説の冒頭「私はくに[17]に帰ってきた（13)」といいつつ，「《Homeland[18]》という語が，不思議なことに英語で，私の中で歌い踊っていた（13)」とあるのだが，あえて英語というベルカヌに直接関係のない言葉で故郷が認識される。これは，帰った先がすでに異質な何かであることを示唆しているのではないだろうか。物理的にアルジェリアであることはたしかだが，ベルカヌは，今，そこに生きる

15　アルジェリアの古い都市の一つ。
16　豪華なものではないが，ベルカヌの家族が一定の経済的余裕のある階層に属することの印ではある。兄は高級公務員，弟はジャーナリストである。
17　“pays”
18　テクストに英語で印刷されている。

人々に，社会に積極的に関わろうとはせず，ほとんど隠者のような生活を送る。しかも，第１部では，書く試みも必ずしもうまくはいかない。ベルカヌの書いたテクストとして読めるのはマリーズへの手紙のみである。これは，ベルカヌの視線が常に海の方を向いていることと対応しているのではないだろうか。地中海の向こうは，マリーズのいるフランスなのだ。

次章で詳述するように，第２部でこの状況に変化がおきる。そして，書かれるものも多様化する。その変化をもたらすのは一人のアルジェリア人女性ナジィアである。（Nadjia と綴られるこの名前は，アンドレ・ブルトンのナジャ《Nadja》を呼び起こさずにはいない。突然，男性の語り手の生活に闖入することや，その男性にものを書かせる女性という役割にも共通性がある。しかし，共通点以上に相違点があり，また綴りも近いとはいえ異なっているのだから，安易な同一化を避けるためにも，本論ではナジィアと表記する。）結局，ベルカヌをエクリチュールに導く要所々々に３人の女性が存在することになる。書くための帰国を促すのはマリーズと母，帰国後最初にエクリチュールの宛先となるのはマリーズ（しかしこの手紙は投函されない），ベルカヌを作家の仕事へと向かわせるのはナジィアである。

第１部のベルカヌは，いささか「現実感」に欠けた登場人物と言えるだろう。フランスへ渡った理由も，帰るきっかけとなった恋人との別れの理由も，その間の20年に及ぶ生活も，読者にはほとんど知らされないからである。その一方，子供時代の回想部分（ベルカヌの１人称による語り，聞き手は近所の漁師ラシッド）では，アルジェリア国旗をめぐる学校でのトラブルも，フランス軍に殺されたおじをめぐるエピソードも，生き生きと語られ，少年ベルカヌの存在感は大きい。この登場人物は，結局，『フランス語の消滅』というテクストにおいて，書くこと，とりわけアラブ語の語りとフランス語のエクリチュールの関係について問題提起するための装置として設定されているのではないだろうか。そしてこの語り手兼主人公が男性であることは，作家とテクストとの距離を広げ，「装置」としての登場人物という印象

を強めている。ベルカヌがフランスを離れて戻った《Homeland》で書こうとするのはフランス語のテクストである。アルジェリア人ベルカヌがフランス語のエクリチュールによって「作家」となっていく過程を検討しなければならない。

2　アラブ語をフランス語で書くこと

ジェバール作品で作家が主人公兼語り手になることは珍しい。ベルカヌは，まだ何も発表していないが，「ディレッタントではなく継続的に書きたいという欲望（154）」を持ち，作家になる途上にある。『フランス語の消滅』の構成はその過程と密接に関わっている。最初に，構成を簡単にまとめておきたい。

全体は３部にわかれ，それぞれの扉ページに，「第１部　帰還　1991年秋」，「第２部　愛，エクリチュール　一ヶ月後」，「第３部　失踪　1993年９月」と印刷されている。各部がさらにタイトル付きの部分に[19]，その中が数字の打たれた章に分かれている。第１部では，主人公ベルカヌによる１人称の語りと彼を外から語る匿名の語り手による語りとが交替する。第２部はベルカヌの１人称の語り，第３部は匿名の語り手による３人称の語りである。ベルカヌの書いたものとしては，第１部のマリーズへの手紙と第２部の「冬の日記」「少年[20]」がテクストとして存在する形をとる。

語り手として，あるいは，匿名の語り手に語られる登場人物として，ベルカヌが中心にいる点は一貫しているが，回想，日記，散文詩，自伝の試み，あるいは語りと同時進行の物語など，形式は300ページ足らずの小説にしては目まぐるしく変化する。他のジェバール作品では，種類の異なるテクストが交替する場合，その交替が繰り返されることで，それぞれのテクストが認

19　第１部は「定着」「ゆっくりした廻り道」「カスバ」，第２部は「訪問者」「冬の日記」「少年」，第３部は「ドリス」「マリーズ」「ナジィア」のタイトルを持つ。

20　“*L'adolescent*”は思春期（adolescence）にある者を意味するが，本論では「少年」の訳語を用いる。

識されやすくなっているが，『フランス語の消滅』の場合，そうしたリズミカルな交替ではなく，ばらばらの印象が否めない。語り手の交替は，だれが語るのかを読者に意識させる効果があり，他のジェバール作品でも重要な手法となっているが，この小説の形式上のばらつきは，語り手のみならず，誰に向けて語っているのかを否応なく問いかける。この問いは，後述するように，『フランス語の消滅』という小説を理解する上で重要になってくる。

(1) ベルカヌを作家にするもの

書くために帰ったといいつつ，なかなか書けないベルカヌを本格的に書くことに向かわせたのは第２部でのナジィアとの出会いである。ベルカヌが「訪問者」とも呼ぶこの女性は別荘に三日間滞在するが，祖父の暗殺事件を語ること，およびベルカヌとの短いが強い関係（肉体関係を含む）を結ぶことで特徴付けられる。

ナジィアの語る内容は，1957年10月に，オランの裕福なタバコ卸商だった彼女の祖父が，FLN（アルジェリア民族解放戦線）に暗殺された事件である。祖父は早くから FLN を支持してきたにもかかわらず，カンパを大幅に増額することを要求され断ったことから，白昼，路上で射殺される。ジェバールは，アルジェリア人どうしの暴力の歴史を，独立後の政治権力がタブーとして封殺してきたことを，すでに『アルジェリアの白』などで批判してきた[21]。ナジィアの語りは，その系譜に連なる批判性を帯びている。

しかし，この場面でより重要なのは，語りの在り方のほうなのだ。ベルカヌの要請でナジィアはアラブ語で語るのだが，それは，あたかも一人芝居を演じているかのようでもある。二人が初めて会った直後の場面としては，小説のレアリスムとしていささか不自然ではあるのだが，話し始めてから黙るまで，一つの全体を成すこの語りは迫力に満ち，おそらく『フランス語の消

21　このテーマを含め『アルジェリアの白』については以下の拙論参照。「アルジェリア女性による90年代フランス語表現文学」，神戸外大論叢，第51巻，第５号，2000年10月，pp.41~72.

滅』の中で最もジェバールらしい部分かもしれない。

ナジィア自身は当時２歳数ヶ月であり，暗殺自体を目撃したわけではない。（ただし，事件直後の錯乱する祖母と父の姿は記憶に刻みつけられる。）従って，ここに見られる語りは「現実」には，祖母を始め周囲の人々から聞いたことの再構築である。全体の語り手はナジィアで，まず，人生を楽しむタイプの祖父の紹介から始まる。ただし，「私の祖父」，「私の祖母」など所有形容詞が１人称の語りを示す以外，ナジィアが主語となることは，出だしと結末部をのぞいて少ない。当時の年齢から見て，その場面に直接介入することがほとんどないからであろう。その後，祖母や父も語り手となって１人称で語る。また家族の女性たちや近所の人々の言葉が，ダッシュに導かれたセリフとしてテクストには書き込まれ，「と彼女は尋ねた」という小説に一般的な表記法が取られることもある。セリフ以外の時制も，前半は小説の地の文に多い単純過去，事件当日の朝からは原則的に現在と変化し，悲劇的場面の臨場感を高めている。また，途中から何度も，迫り来る悲劇が暗示され，サスペンス効果をあげるなど文学的技巧も明らかである。『フランス語の消滅』の読者は，特にナジィアの１人称がほとんど介入しない語りの核心部を，語り手を特に意識せずに「小説」のテクストとして読むことが可能だ。しかし，ベルカヌはそうではない。

語りの現場に立ち会うベルカヌは，ナジィアの存在にこそ強い影響を受ける。彼が聞くのは何よりもナジィアの発するアラブ口語であり，それが彼を書く人とする。（一方読者はそれを聞けない。あくまでフランス語のテクストとして読むのみである。）来るべき悲劇を暗示する一節のただ中でナジィアが立ち上がった直後，闖入者のようにテクストに挿入されるパラグラフがある。

「今後は書く者となった私（ベルカヌ）は，何日も何日もたってから再構築する，ナジィアを，記憶を呼び起こす彼女の声を思い出す，彼女の物語（récit）を，アラブ語で繰り出された記憶を，フランス語で捉え，

周りを囲む（中略）。私は書く，そう，私は書記（scribe）だ，小さな書記だ（124）」。

第１部でベルカヌの書くのはマリーズへの手紙のみであり，そこでは，何語で書くかということは問題にされなかった。フランス語以外あり得ないかのように。それに対しここでは，アラブ語を，記憶の中で事後的に聞きつつフランス語を書くというベルカヌの書く行為の特徴が示される。

ベルカヌのエクリチュールについて考えるために，もう一つ検討しなければならないのは，ベルカヌとナジィアの性的関係と言葉の問題である。マリーズとの関係では，彼女がベルカヌの母の言葉を理解できないという状況があった。

「覚えているかい？時には，ぼくたちの官能が抱きあう瞬間に，君がぼくに，ぼくの最初の言葉（ma première langue）で話せないことを悲しく思うことがあった。まるで，ぼくたちが抱き合っているその最中に，ぼくの子供時代が復活し，意に反してふいに現れたぼくの言葉（mon dialecte[22]）が君を飲み込んでしまうかのようだった（24）。」

ナジィアとの関係の場面に随伴するのはベルカヌの「最初の言葉」，母の言葉，アラブ語である。

「愛の行為の最中にアラブ語を話すのはほんと，久しぶりだわ，それに…（彼女はためらう）その後にも！（135）」

ただし，二人の言葉の差異も書き込まれ，ナジィアは「私の方言（dialecte）気にならない？（134）」と尋ねてもいる。彼女にとって出身地オランの言葉とモロッコ人の母のアラブ語が「最初の言葉」であり，アルジェ出身のベルカヌのそれとは異なっている。この小説では，「アラブ語」という語以外に，「母の言葉」「子供時代の言葉」「最初の言葉」そして「方言（dialecte）が用いられている。この「方言」は，地方差も意味するが，アラブ語の書き言葉に対するアラブ口語を指示する。「アラブ語」という表現が用いられる際

22 〈dialecte〉（方言）という語については後述。

も，文脈からアラブ口語を意味していることがわかる。

ナジィアとベルカヌの性的シーンを記述するテクストは，もちろんフランス語で書かれているのだが，イタリック体のラテン文字で表記された幾つかのアラブ語が含まれている。フランス語訳がない場合も（«*ya habibi*»[23]），先にフランス語表記があってアラブ語が付け足される場合もある（«Ô,ma sœur（*ya khit*）»[24]）。こうした呼びかけ語以外に，単語自体は表記されないが，内容が解説されるアラブ語表現がある。「《痛いわ，苦しいわ！》この，震えるようなアラブ語が官能的なものでしかないのを，私（ベルカヌ）はどれほどよく知っていたことか（144）」という箇所で，カッコ内のナジィアのセリフは，アラブで言われたはずだが，表記はフランス語のみであり，続く解説は主にアラブ語話者以外の読者に向けられていると考えるのが妥当だろう。さらに，上に引用したアラブ語の呼びかけ（«Ô,ma sœur（*ya khit*）»）が，アラブ言語文化の特徴の一つとも言われる詩の朗唱を引き起こす場面（ベルカヌはこれを「一種の言語的トーナメント（147）」と呼ぶ）も「原文」は引用されずフランス語で説明される。こうした表記は『フランス語の消滅』において，テクストがあくまでフランス語で書かれていることと，ナジィアのアラブ口語がその起源にあることの二重性を表現する手段の一つになっている。

ベルカヌとナジィアは三夜を共にするのだが，ナジィアが外出した二日目の朝，「《書く》と私（ベルカヌ）は自分に言う！私は出さなかったマリーズへの手紙を手で押しのけた。《自分のために書く》と私は決心した（136〜137）」。マリーズへの手紙を押しのける身振りは，手紙という他者に向けたエクリチュールをやめ「自分ため」に書く姿勢を象徴するとも考えられるが，フランス語でのコミュニケーションよりもアラブ口語を重視する姿勢とも読める。この決心の後でベルカヌは，「起きてすぐ机に向かった，（中略）

23　138ページ，142ページなど。「愛する人よ」の意。
24　147ページ，150ページなど。「おお，私の姉妹」の意。

ナジィアの声の中にいること，（中略）とりわけ彼女の言葉（dialecte）の熱の中に身を落ち着けるために（139）」というのだが，フランス語で書くとは書かれていない。アラブ語ではなくフランス語で書くことに言及があるのは，ナジィアがベルカヌのもとを去ってからである。

私はアラブ語のアルファベットでは書かない。私たちの融合を表現するには，この方がよりふさわしかったのだろうけれど（中略）ナジィアの影の中で，私はフランス語で書く（169）」。

アラブ口語を出発点として，ほとんどそれに没頭しながら書くのがフランス語によってであることの理由は一切説明されない。さらに重要なのは，ナジィアの声にひたりながら，実際に何が書かれるのかという点である。

第２部は「訪問者」に続いて，まず，「冬の日記」（１から３の章に別れ，２章と３章には日付がある），その次が「少年」と題された一種の自伝である。この２つのテクストは，第３部で，ベルカヌの弟ドリスによって存在が確認される。ベルカヌは第３部の始まった時点でその失踪が告げられ，ドリスは，別荘に残された「遺品」（小説の最後まで死亡は確認されないのだが）の中に，この２つとマリーズへの出されなかった手紙を発見するのだ。第３部のこの記述によって，これらのテクストの書き手はベルカヌと設定されていることがわかる。「訪問者」はその中に入っていない以上，ベルカヌの１人称の語りではあっても，第１部と同じく，書き手として作者ジェバール以外は設定されていないことになる。これは何を意味しているのだろうか。ナジィアの口語に触発されたと繰り返し述べつつベルカヌの目指したのは，アラブ口語の吹き替えとしてのフランス語のエクリチュールではない，ということではないだろうか。では，そのエクリチュールはどこへ向かうのか。

⑵　ベルカヌのテクスト―「冬の日記」と「少年」

「訪問者」と「冬の日記」は不思議なつながり方をしている。ナジィアは三日間ベルカヌの別荘に滞在するのだが，三日目の内容だけが，「冬の日記

１章」で語られるため，短いナジィアの滞在が全体として一つにまとまらず，一見奇妙に分断された印象を与えるのだ。しかし，物語の筋立てに基づく構成を離れ，言語使用の特徴という視点から読むと，「訪問者」と「冬の日記　１章」の間には，たしかに違いが認められる。前者では，感覚的，官能的，あるいは感情的な言語使用が特徴であるのに対し，後者は理性的，論理的なそれが中心になっている。

「冬の日記」の１章で問題になるのは政治と言語，そしてアルジェリアの社会批判である。ナジィアはずっと外国住まいで，時々帰国するのだが，最近のアルジェリアでイスラム主義者たちが台頭していることに懸念を示し，特に彼らのアラブ語が「痙攣をおこした，調子のおかしくなった，逸脱した言語（157）」だとして激しく批判する。ナジィアとの政治論議がベルカヌに，独立の６ヶ月前，彼が16歳の時の記憶を呼び起こす。アルジェリア国旗を振り回した廉で逮捕され，送り込まれた収容所でのエピソードである。新入りの収容者の一人が，無気力で私的なことにしか関心のない収容者たちに，独立後を見据えた政治的議論を呼びかける。全体はアラブ語で話すのだが，一箇所だけ「アルジェリアはライックな国になるだろうか（163）」という文だけフランス語で言う。フランス語を解する何人かが，そうでない人々のために通訳するのだが，「ライック（laïc）[25]」という単語だけはできない。フランス語風に発音したアラブ語〈l’Aïd〉（祭り，祝祭）だと思い込む。

この回想はナジィアの発言に対する応答としてある。彼女の指摘するイスラム主義の台頭は，独立前から議論するべきだった政治と宗教の関係をめぐる問題を等閑視してきた結果であり，それが今になって社会に混乱を引き起こしているという考え方である。しかしこの批判は別のことも意味してしまわないだろうか。独立前「ライック」という語の示唆する政治的概念を知らなかった，おそらく今日に至るも知らない，あるいは知ろうとしないアル

25　日本語では「政教分離の」「世俗的な」「非宗教的な」などと訳されるが，名詞形〈laïcité〉はカタカナで「ライシテ」とされることも多い。日本で一般的に理解される「政教分離」とフランスのライシテ概念が必ずしも対応しないという判断からであろう。

ジェリアを批判することのうちに，フランス語にはある，この政治的概念がアルジェリアにおいても価値を持つはずだという暗黙の前提を読み取ることが可能ではないだろうか。そしてそれは，後述するジェバールのヨーロッパ志向の問題ともつながるのである。

「冬の日記」の３章は，1991年12月25日から翌1992年２月14日までの期間のうち数日間の出来事を書いた，日付を伴う短い文章で構成されている。この期間は，国政選挙第１回投票における FIS（イスラム主義政党「イスラム救国戦線」）の圧勝，イスラム主義者に権力が移ることを阻止しようとする勢力による一種のクーデーター，第２回投票停止など，アルジェリア社会が大混乱に陥り，以後内戦ともいえるほどの危機的状況が10年以上続くことになる，その端緒の時期である。ごく短いこれらのテクストは，政治的考察というより，「冬の日記」１章と互いの内容を照らし合うことを担っているように思われる。１章での懸念が現実となり（日付はその現実性の印でもある），批判の正当性が浮き彫りになるのが３章である。

この２つに挟まれた章は，日付からして「11月（もう何日かわからない）(169)」と他の章と異質である。その後半は「ナジィアのためのスタンス(170)」と題され（スタンス[26]とあるが散文），２人称[27]の頻出が特徴になっている。ここでは，ベルカヌが語り手としてだけでなく書き手として，書く決意を繰り返す（「私は君の前に書記として場所を定める。君の正面に，君に寄り添って，私の沈黙のパロールの中に（171）」）だけでなく，フランス語で書くことへのためらいも示す。

> 「私はあなたの影の中で書く，孤独な言葉の中で，その光は私を傷つける！このフランス語は私の声を凍りつかせるだろうか。私の手が紙の上をすべる間，私は君と私の間に屍衣をひろげているというのだろうか(172)」

26　詩型の一つ。悲劇的叙情詩。

27　親称と敬称がほとんど数行ごとに交替する。この２つを区別しないアラブ口語の影響を暗示しているのかもしれない。

ところで，エクリチュールがナジィアの熱い口語を，凍りつかせ，それを覆う屍衣ともなるのは，はたしてフランス語だからだろうか。アラブ語とフランス語という言語の違いのみが問題なのだろうか。すでに指摘したように，この小説にはフランス語で書く理由について直接の言及がない。上の引用でも，表面に現れたアラブ語とフランス語の対立は，口語と書き言葉との対立と重ねられていると読むこともできる。周知のようにアラブ語は書記言語と口語の差が大きい。『フランス語の消滅』においては，アラブ語内部でのこの対立が一度も問われないことと，書記言語の位置にフランス語が来ることとは対をなすように思われる。フランス語で書くことの「理由」を，一度も言及されない書記言語としてのアラブ語の存在が裏で支えているかのようでもある。

書き手となって後のベルカヌの２つのテクスト，「冬の日記」と「少年」は，内容も形式もかなり異なっている。現在を書く日記と，少年時代の回想とがはっきり分化することで，後者が「作品」として自立する。

ページ数としては『フランス語の消滅』のおよそ20％を占める「少年」はベルカヌ自身の思春期の回想である。娼家での性的イニシエーション，カスバに発した自然発生的デモと破壊行為への参加，その１年後のアルジェリア国旗を振り回したという理由での逮捕，拷問，収容所における政治的イニシエーションなど，この時代を生きたアルジェリアの若者を扱った文学にはおなじみのテーマが続く。この時代以前の子供時代の思い出は第１部で断片的に語られるが，それに続く時代の回想は，一つの流れを持ってなめらかに進む。語り手（ベルカヌの１人称）や視点人物（同じくベルカヌ）が安定し，時間軸に沿って一方向に進むこのテクストは，これらの要素が不安定に交替する，小説の他の部分と対照的である。そのことは，「少年」というテクストの「自立性」の強化にも一役買っている。実際，「少年」は『フランス語の消滅』の中で，最もまとまりのよい独立した物語を成している。

アラブ口語を聞きながら書く，しかし吹き替えでないエクリチュールはこ

うして，過去の回想において実現しつつあるかのようである。「フランスで，あまりに長い間私は自分を忘れていた（181）」というベルカヌにとって，少年時代の回想こそが自分を取り戻すことだったのか。それを可能にしたのは帰国とナジィアのアラブ口語であり，順調なエクリチュールはまとまった物語（レシ[28]）を生み出し，自己回復は安定したテクストの生成と手を携えて進む，と言えるだろうか。ベルカヌという登場人物のレベルで見れば，このように読むことは可能だ。しかし，「少年」は『フランス語の消滅』の一部をなしているのであり，小説全体を読もうとすれば，この解釈にとどまっていることはできない。その時には，「少年」というテクストのもう一つの特徴を忘れてはならないだろう。これは中断したテクストだということを。「少年」の独立性はたしかに高いのだが，第３部冒頭で告げられるベルカヌの失踪[29]は，このテクストを『フランス語の消滅』の中にもう一度取り込む。今度はドリスが発見した原稿として「少年」が提示され（タイトルは言及されるが内容には触れられない），物理的な原稿自体は，ドリスからベルカヌ失踪の連絡を受けアルジェに駆けつけたマリーズに，日記と共に託される（ただし別紙に書いてあった「ナジィアへのスタンス」は除いて）。完成原稿であったのかどうかの判断も，結局は読者に委ねられることになる。この構成は，ベルカヌの失踪の意味とテクストの行方という問題を，あらためて小説全体の文脈から考えることを要請する。

３　消滅するのは何か，あるいはテクストは誰に届くのか

⑴　届かない手紙

ベルカヌは失踪[30]する。カビリー地方の山中で，側溝に横転したベルカヌ

28　ドリスが発見した原稿には一旦タイプされた「小説」の文字が消され，かわりに「レシ（物語）」と記されていた。c.f. *La disparition de la langue française*, p.262.

29　「冬の日記」の最後は1992年２月，失踪は1993年11月とされる。

30　原文では《disparition》。同じ単語が，タイトルのように「フランス語」についても，ベルカヌについても用いられているが，日本語では前者については「消滅」，後者については「失踪」を当てた。

の車が発見されるも，ベルカヌ自身の行方は杳として知れず，小説の最後まで，死亡は確認されない[31]。本論の「はじめに」でも引用したボワダールの解釈にあるように，ベルカヌは，90年代，相次いでテロの犠牲となったアルジェリアの知識人たち，とりわけフランス語表現の作家やジャーナリストの象徴なのだろうか。上でも述べたように，ベルカヌは帰国後海辺の別荘にひきこもり，社会との接触をほとんど持たない。その上，彼のテクストは発表されておらず，ドリス以外誰にも読まれない。それも，読んだことが明確に示されているわけではない。読むのは『フランス語の消滅』の読者のみなのだ。（おそらく，原稿を託されたマリーズは後にフランスで読むだろうと推測することは可能だが。）そもそも，彼がフランス語で何か書いていることすら，ドリスを除いて誰にも知られていないのである。現実にテロの犠牲になった人々と同一視するには無理がある。

しかし，知識人の運命と直接重ならないとしても，その失踪に，アルジェリアにおけるフランス語使用の将来に関する悲観的展望を読むことは不可能ではないだろう。なにしろタイトルからして『フランス語の消滅』なのだから。だが，この小説はそうした一元的な読みに還元できるものではない。失踪あるいは消滅の意味を別の角度から考えるためにも，次に，テクストが誰に宛てられているのか，だれに読まれるのか，という問題を考察しなければならない。『フランス語の消滅』に関していえば，この２つの問いは必ずしも同じことにはならない。

ベルカヌは「冬の日記」で，「私はあなたに書く，あなたに話す，あなたの聴覚にしがみつく…（173）」と書いている。「書く」も「話す」も，ここでは「あなたに」という間接目的補語のみで「何を」にあたる直接目的補語がない。「あなたに書く」と訳した文（Je vous écris）は，普通は「あなたに手紙を書く」という意味で直接目的補語なしに用いられる。ナジィアは，

31　同じジェバールの作品で，遺体の発見されない「死者」を中心人物の一人とした小説に『墓のない女』がある。拙論「物語はなぜ進まないのか―アシア・ジェバール『墓のない女』と相続権なき作家―」，『神戸外大論叢』，第59巻，第３号，2008年９月，pp.73~94, 参照。

ベルカヌのテクストの「起源」でもあり「宛先」でもあるのだ。しかし，小説中，彼のテクストはナジィアに届くことはない。ナジィアの側からもベルカヌに手紙が書かれるのだが（93年12月の日付付き），第３部３章のほとんどを占めるこの手紙は，彼の失踪を知らずに書かれており，届いた時にはすでに彼は行方不明である。ドリスはベルカヌあての手紙は読まない。従って，この手紙を読むのは『フランス語の消滅』の読者のみということになる。テクストは届かない，あるいは届いたとしても名宛人に読まれない。ドリスの視点からの短い部分を除いて，小説の最後にあるまとまったテクストがこの手紙であることは，書かれたものによるコミュニケーションの不可能を暗示してはいないだろうか。

⑵　地中海の南と北

ナジィアの手紙は，ベルカヌとの関係以外の視点からも分析される必要がある。オラン出身のナジィアは，祖父を同胞に殺された事実を忘れることができず，逃れるようにアルジェリアを出て，たえず移動しながら（主に地中海岸の諸国）生きている40歳に近い女性である。彼女はこの手紙で，しばらくイタリアのパドヴァに居を定めることになり，ベルカヌにもイタリアに来ないかと提案している。もちろん移民労働者として移り住んだのではなく，パドヴァ大学で学生として「ルネサンスに没頭したくてうずうずしている(285)」というのだ。そして「それはヨーロッパで最も古い大学の一つであり，アンダルシアの遺産を実らせた大学の一つであることが私には誇りに思えるの（285)」と，アンダルシア文化に連なる者としてのアイデンティティを前面に出し，自分はアンダルシア経由でパドヴァとつながるのだと納得しているかのようである。さらに，開かれた精神を象徴するものとして，パドヴァにも住んだことのあるエラスムスが引用される。イタリアへ向かう飛行機（その前に彼女はエジプトに住んでいた）の中で『痴愚神礼讃』を夢中で読むナジィアが，ヨーロッパ各地を移動したこの哲学者と移動する自分とを

重ねていると解釈するとしても，エラスムスの登場はいささか唐突の感を免れないだろう。この部分は，寓話の最後に添えられる「教訓」に似ているとさえ言えるのではないだろうか。

ヨーロッパ，アメリカで高い評価を受け，アカデミー会員にして，毎年ノーベル文学賞候補に名のあがる作家であるジェバールは，「権威」という言葉は相応しくないにせよ，多くの研究者にとって，すでに確立された価値と認識されている。また，ポストコロニアル文学を論じる場合，一歩間違えば植民地主義的イデオロギーへの加担とみなされかねないだけに，批判は一層難しい。しかし，ナジィアがただちにジェバールではないにせよ[32]，あきらかなメッセージ性を帯びた（手紙とはそもそもメッセージなのかもしれないが）この手紙に特に顕著に現れていると思われるヨーロッパ志向，地中海北岸志向を指摘しないわけにはいかない。手紙でイタリア，特にこのパドヴァが，他者を受け入れる寛容性に富んだ地としていささか過度に理想化されているだけではない。「アンダルシア」に注目すると，小説の他の箇所にも何度も現れていることがわかる。ジェバールはこれまでも，作品やエッセーで，登場人物の，あるいは自らの母語であるアラブ語がアンダルシア起源であることを繰り返し述べている。『フランス語の消滅』でもベルカヌは「君（ナジィア）にアンダルシア方言で呼びかける（172）」などその系譜に連なる。「アンダルシア方言」は，その言語学的存在の有無は置くとして，作家にとっても登場人物にとっても，誇るべき遺産なのだ。アル・アンダルスが，イスラム教，キリスト教，ユダヤ教など異なる文化が共存し得た寛容な社会として肯定的に捉えられていることはたしかだ。そればかりでなく，イベリア半島に栄えたアラブ起源の文化が折りにふれ参照されることで，地中海を超えた北岸，ヨーロッパとの「血縁」が確認されているのではないだろうか。

32 『フランス語の消滅』ではナジィアが「訪問者」と呼ばれるが，『墓のない女』では，同じ「訪問者」という言葉が，限りなくジェバールに近い語り手―登場人物に対して用いられている。上掲拙論参照。

しかし，『フランス語の消滅』における「南北関係」の書き込みは単純ではない。たとえば，暴力について，植民地支配者としてのフランスがふるうそれは，ベルカヌの回想の中に何度も現れる。だが，暴力はフランスの側だけにあるのではない。拷問などに関してルーヘは「彼（ベルカヌ）は，向こう岸から来た征服者たちがそれについて彼ら（アルジェリア人）に教えることは何もないことを知っている[33]」と表現するのだが，実際，この小説では，かつてアルジェに君臨し，地中海一帯の恐怖の的だった海賊が頻繁に言及され，彼らは子供時代のベルカヌのヒーローだったことが語られる。また，ナジィアの祖父の例の他にも，ベルカヌが幼い時に目撃した集団リンチなど，アルジェリア人による生々しい暴力も書き込まれている。地中海南岸の暴力の記述は，アルジェリアに対する政治的，社会的批判として機能する一方，「南岸」が一方的に「北岸」の暴力を被るだけの存在ではないことの主張にもなり得る。と，同時に「北岸」の暴力をある程度相対化してしまう面もあることは否定できない。

ルーヘはまた，「それ（集団的記憶の殺人的側面）がこの本の前面を占めているために，絶え間ない平和な交流の事実という豊かな背景が忘れられてしまう[34]」と述べ，その印としてテクスト中の文化的事項の引用をあげる。この小説で参照される文化史的記号は地中海と縁の深いものが多いが，オデュッセウスから，エラスムス，カミュまで，一般的には「北岸」の文化史に分類される固有名詞が圧倒的である[35]。そして明らかに，読者がその価値を理解することが前提になっている。それに対し，「南岸」の文化的事象として参照されるのは，ベルカヌの母の歌，ナジィアが朗唱する詩などがあるにせよ固有名詞がないのは，「読者」がそうした固有名詞を知らないことが

33　Ernstpeter Ruhe, “Ecrire est un retour à ouvrir”, in sld. Mireille Calle-Gruber, *Assia Djebar Nomade entre les murs…*, Maisonneuve & Larose, 2005, p.59.

34　ibid., p.60.

35　アルジェリア生まれのカミュの位置付けは簡単ではないが，一般にはフランスの作家として認識されていることを考慮すると「北岸」に入るのではないだろうか。

前提になっているからだろうか。

アルジェリアを地中海文化圏の一員とみなすこと，またナジィアの手紙で称揚される移動という生き方に価値を見出すこと自体を問題にしたいのではない。ただ，この手紙では，地中海の北と南の双方を含んだ移動空間ではなく，事実上，「安全」で「寛容」なヨーロッパ世界のみが想定されているのである。ベルカヌも「冬の日記」で「１年か２年後，君は一軒の書店に入るだろう。サン・シュルピス[36]の，あるいはヴェニスの大運河から遠くないところにある書店に。君はその本を買うだろう（181）」と，自分が書く本がフランスやイタリアの書店に並び，ナジィアに届くことを夢想している（この時点でベルカヌはナジィアの居場所を知らない）。ドリスは，ベルカヌの残した原稿をマリーズに託す際，「「少年」についていえば，私は，それを読むべきなのはあなただと思う（263）」と彼女に言う。

書くことは必然的に「北岸」を必要とするのだろうか。

上で指摘したジェバールのヨーロッパ志向は，しかし，それのみを目指し，そこに受け入れられることを願うといった単純なものではない。ジェバールが「北岸」で認められた作家であるという事実は，かならずしも彼女が自分と「北岸」との関係を肯定的にのみとらえてそこに安住していることを意味しない。それどころか，安全な空間を移動しつつ書く以外に方法がない作家の，生い立ちと歴史的条件からフランス語で書く以外にない作家の，自らの仕事の宛先を，行方を見つめる透徹したまなざしは，悲劇的と言える性格を帯びている。

「少年」の宛先はナジィア，「再び見出された私のカスバである君（181）」，さらに言えばアルジェリアである。そして，テクストは宛先に届かない。『フランス語の消滅』という小説全体もまた，届かないテクストなのではないだろうか。アルジェリアに帰って生きること，フランス語で書くことを試み，そのどちらも中断して（させられて）しまった主人公の物語として読む

36　パリ左岸の地名。古くからの文教地区の一画。

時，それは，再び見出されたはずのアルジェリアに受け取られることなく「消滅する」テクストとなる。複雑に関係するテクストが不安定に交替する『フランス語の消滅』は，絶えず「宛先」を問題にする小説であり，ジェバールは自らの仕事の全体をそこに重ねているのではないだろうか。フランス語使用の後退に抗してフランス語の重要性を主張しているのでも，自らのフランス語使用を正当化しようとするのでもない。ヨーロッパの書店に並ぶ自分の本が，実は宛先に届きそこなっているのではないか，作品の源泉であるアルジェリアの口語世界に，本当につながっているのかという不安こそが，この小説の根底にある悲劇なのではないだろうか。

おわりに

ベルカヌはフランス語で書く理由を一切説明しない。正当化もしない。しかし，自分はフランス語で書くのだと繰り返し述べる。それは，フランス語が自明のものではないことを強く示唆する。フランス語が母語の作家がフランス語で書く時，いちいちそれをことわりはしない。

アルジェリアの女性たちの言葉に耳を傾け，それに寄り添うことを最重要テーマとしてきたジェバールがフランス語でしか書けないというジレンマについては，彼女自身が何度も語っている。また，それが理由で書けなかった時期に，映画製作によって，女性たちの口語とフランス語を共存させる創作方法を実現しているとは言うものの，その後は同様の創作は行われず，フランス語で小説を書くという方法に戻っている。アルジェリア出身でフランス語で書く人々は，ジェバールより若い世代にも存在する。衛星放送の受信が一般化して以降，フランス語は植民地時代より普及しているという見方もある。しかし，教育はアラブ語（古典アラブ語）で行われ，人々の「母語」がアラブ口語やベルベル語なのは現実である。ジェバールの仕事は，フランス語をアルジェリアの文化的遺産として維持するためにあるのではない。こうした条件で書く作家につきまとう「不安」と格闘し，あるいは折り合いを付

けつつ進むその仕事は，「宛先」をめぐる問いから解放されることはないかもしれない。たとえ，あらゆる作家の読者が本来「架空の存在[37]」であるとしても。

筆者はかつて，「相続権なき作家」という視点から，自らの書く行為の危うさ，語ろうとするものと書く行為の関係を問い直す試みとしてジェバールの『墓のない女』を分析した[38]。『フランス語の消滅』は，今度は宛先の側面からエクリチュールの不安を描くものとして読めるのではないだろうか。この２つの小説は，ジェバールという作家の位置を独自の方法で表現すると同時に，他の作品がどう読み得るのかに関して多くのことを示唆するように思われる。「届かない」テクストは作家の不安を超え，あらゆる岸辺の読者を巻き込んでいく。

使用テクスト

Assia Djebar, *La disparition de la langue française*, Albin Michel, 2003.

引用文献

ALBERT, Christiane, *L'immigration dans le roman francophone contemporain*, Karthala, 2005.

BENAYOUN-SZMIDT, Yvette, *Assia Djebar*, L'Harmattan, 2008.

BENHAÏM, André, "Pas à pas: l'œuvre vagabonde d'Assia Djebar", in Audrey Lassere et Anne Simon éd, *Nomadisme des romancières contemporaines de langue française*, Presses Sorbonne nouvelle, 2008.

BOIDARD BOISSON, Christiane, "*La disparition de la langue française* d'Assia Djebar: le mirage de l'impossible retour?", in sld. Najib Redouane et BENAYOUN-SZMIDT, Yvette, *Assia Djebar*, L'Harmattan, 2008.

FISHER, Dominique, *Ecrire l'urgence*, L'Harmattan, 2007.

GAFAÏTI, Hafid, *La diasporisation de la littérature postcoloniale*, L'Harmattan, 2005.

O'RILEY, Michael F., "Victimes, héros et spectres du passé colonial dans *La*

37　ホルヘ・ルイス・ボルヘス，『詩という仕事について』，鼓直訳，岩波書店，2011年，p.166.
38　拙論，前掲。

disparition de la langue française d'Assia Djebar", in *Nouvelles Etudes Francophones*, Vol.21, No.1, Printemps 2006.

RUHE, Ernstpeter, "Ecrire est un retour à ouvrir", in sld. Mireille Calle-Gruber, *Assia Djebar Nomade entre les murs…*, Maisonneuve & Larose, 2005.

SCHUCHARDT, Béatrice, "Manifestation d'une esthétique interstitielle dans *La disparition de la langue française*", in Wolfgang Asholt, Mireille Calle-Gruber et Dominique Combe éds, *Assia Djebar, littérature et transmission*, Presses Sorbonne nouvelle, 2010.

ホルヘ・ルイス・ボルヘス，『詩という仕事について』，鼓直訳，岩波書店，2011年